

呉市立美術館 令和5年度コレクション展 I 出品目録 + ミニ解説

令和5年4月22日(土)～6月11日(日)

※ 都合により出品作品に変更が生じる場合があります。
※ 目録の記載順序と展示の順番は必ずしも一致しません。

特別展示

No.	作者	生没年	作品名	制作年	材質・技法	寸法(cm)	備考
-	オーギュスト・ルノワール	1841-1919	麦わら帽子の少女	1885(明治18)年	油彩・麻布	48.0 × 37.0	

呉美の陶芸作品 そろい踏み again

日本陶芸の歴史は、16,000年前の縄文時代に作られた世界最古級の土器「縄文土器」に遡ります。縄文土器は、壺、鉢、甕(かめ)など食料の保存や煮炊きの用具として使われたほか、土偶(どぐう)(人形(ひとがた)の土器)は精霊が宿る偶像(ごうぞう)として豊穰や多産、安泰などの祈りの対象となり、人々の心身両面を支える必要不可欠なものでした。また、桃山時代には喫茶の用具である茶陶に人間精神が投影されるようになりました。このように、日本において陶磁器は人々の生活と精神の両方に深く関わりながら制作され、その長い歴史の中で育まれた美意識や様式の多彩さは世界的にも例がないほどです。

特に芸術における、思想、感情、個性の表出を重視する近代以降では、陶芸を自律した芸術領域として独自性を確立しようとする志向が強められ、さらに多彩さを増していきました。柔軟で可変の「土」が「火」と出会う(高温で焼成される)ことにより、全く異なる物質である堅固で恒久的「陶(とう)」に変容する過程に触発され、さらに、土や火そのものに着目して、焼かない土を素材とするアンファイア(unfire)、土以外のものを焼くファイアリング(firing)など、表現のあり方が一層広がっていきました。

本展は、コロナ禍により開幕後間もなく中断した令和3年度コレクション展Ⅱのリバイバル企画で、当館が所蔵する近現代の陶芸作品54点を「呉美(くれび)の陶芸作品(やきもの)そろい踏み」として「造形vs装飾」「陶芸vs彫刻」「革新vs伝統」の三部構成で展覧し、百花繚乱とも言える近現代陶芸の一端をご覧ください。

1. 造形 vs. 装飾 — 富本憲吉と教え子たち —

陶芸家・富本憲吉(1886-1963)は、既存の形式や職人的な技巧を脱して、個性による独創を説き、絵画や彫刻に比肩する芸術として、陶芸の近代化を導きました。独学で陶芸を学び、従前は分業されていた陶芸の制作工程(粘土成形から絵付け、焼成まで)を作家が一貫して手掛けることを重視しました。戦後は、いち早く京都市立美術大学(現・京都市立芸術大学)で学校教育により陶芸を教授し、多くの優れた陶芸家を育てました。富本は、「壺は形にあり」「陶芸は究極の抽象造形」と考え、陶芸制作の基礎として「形(造形)」の重要性を説き、既存の約束事に囚われない白磁壺を創作。一方、「模様から模様をつくらじ」と、既成の模様を参照せずに自然の観察に基づく独自の模様を追求し、四弁花文や羊歯文など器表に沿った文様を創案。そして文様と造形の調和を唱えました。

本章では、「造形(形)」と「装飾(模様・文様)」という陶芸を構成する二大要素に注目し、富本憲吉とその弟子たちの作品により、その調和や対立、相乗効果など様々な表現のあり方をご覧ください。

No.	作者	生没年	作品名	制作年	材質 技法	寸法(cm)	備考
						高×幅×奥行 / 高×径	
1	富本憲吉	1886-1963	色絵竹林月夜台鉢	1936(昭和11)年	磁器	7.0×27.3	
2	富士原恒宣	1939-	白瓷大壺	1980-1990年代	磁器	39.5×43.7	
3	富士原恒宣	1939-	白瓷捻面取壺	1980-1990年代	磁器	26.5×19.0	
4	富士原恒宣	1939-	白瓷捻面取壺	1980-1990年代	磁器	32.3×19.5	
5	富士原恒宣	1939-	白瓷扁壺	1980-1990年代	磁器	45.0×26.0	
6	和太守卑良	1944-2008	彩土杉文器	1981(昭和56)年	陶器	47.5×46.8×21.7	
7	和太守卑良	1944-2008	芒雲花文器	1986(昭和61)年	陶器	48.7×30.5×18.5	
8	栗木達介	1943-2013	銀紅彩地文陶「風のトルソー」	1985(昭和60)年	陶器	82.9×29.1×23.7	
9	森野泰明	1934-	WORK 75-16	1975(昭和50)年	陶器	20.5×65.6×65.8	
10	森野泰明	1934-	WORK 85-7	1985(昭和60)年	陶器	64.0×50.5×13.4	
11	森野泰明	1934-	誕生	1969(昭和44)年	陶器	30.2×27.5×27.5	
12	柳原睦夫	1934-	空の記憶	1977(昭和52)年	陶器	53.3×44.2×37.4	
13	柳原睦夫	1934-	彩文金彩香花瓶	1985(昭和60)年	陶器	46.8×40.5×31.8	
14	柳原睦夫	1934-	紺釉金銀彩花瓶	1971(昭和46)年	陶器	32.8×24.9	
15	瀬戸 浩	1941-1994	灰釉銀ストライプ壺	1985(昭和60)年	陶器	39.8×39.8	
16	瀬戸 浩	1941-1994	黒釉銀ストライプ壺	1985(昭和60)年	陶器	73.8×40.6×19.0	

2. 陶芸 vs. 彫刻 一走泥社の系譜 & 彫刻からのアプローチ

第二次世界大戦後、美術界は新しい時代の芸術の創出に向けて熱気がみなぎり、ジャンルを超えて美術思潮を共有し、活動の交流が行われました。陶芸界では、思想表現への意欲が高まり、用途を捨てた純粋造形としての陶芸「オブジェ焼」が創出されました。中心となったのは、八木一夫(やぎかずお)、鈴木治らにより創立された京都の陶芸家集団・走泥社(そうでいしゃ)(1948-1998)。彫刻とは異なるオブジェ焼の特質を「陶器の中は空ろ」であることなど「土→成形→焼成→陶」という焼き物のプロセスに沿って思索し、焼き物ならではの独自性と表現の可能性を探索しました。一方、彫刻界においても、イサム・ノグチのテラコッタや辻晉堂(つじしんどう)による陶彫(とうちょう)など、様々な造形素材の一つとして陶土が採用されるようになりました。陶芸家が焼き物のプロセスに沿って制作するのに対して、彫刻家は目指すイメージに素材(陶土)を沿わせて制作する点で異なります。

辻晉堂(1910-81、京都美術大学彫刻科教授)と八木一夫(1918-79、同科講師)が交流して高め合ったように、正反対の造形理論を持つ陶芸と彫刻は刺激と影響を与え合いました。

No.	作者	生没年	作品名	制作年	材質 技法	寸法(cm)	備考
						高×幅×奥行 / 高×径	
17	笹山忠保	1939-	ウェーブした三つの立方体	1977(昭和52)年	陶器	11.6×92.7×36.6	
18	笹山忠保	1939-	金彩風炉先屏風	1984(昭和59)年	陶器	56.0×52.6×7.4 56.1×52.8×7.9	
19	鈴木 治	1926-2001	遠い馬	1977(昭和52)年	陶器	85.7×48.9×38.7	
20	林 秀行	1937-	鳥の談笑	1983(昭和58)年	黒陶	51.6×40.4×14.0 60.8×36.8×15.8	
21	林 秀行	1937-	行儀のよい天使	1982(昭和57)年	磁器	52.0×15.5×20.0	
22	三代宮永東山(理吉)	1935-	立方体に参加する八つの直方体	1975(昭和50)年	磁器	37.9×24.4×24.2	
23	三代宮永東山(理吉)	1935-	風の巣	1985(昭和60)年	磁器	36.3×46.9×32.4	
24	中村錦平	1935-	土瓶	1984(昭和59)年	陶器	15.2×28.6×14.6	
25	中村錦平	1935-	土瓶	1985(昭和60)年	陶器	17.0×25.6×18.7	
26	中村錦平	1935-	香炉“らでしよなるや”	1986(昭和61)年	陶器	12.8×12.4×10.7	
27	石山 駿	1941-	モーニングタイム	1970(昭和45)年	陶器	19.5×36.2×27.7	
28	石山 駿	1941-	ピ・ピ・ピ	1975(昭和50)年	陶器	28.1×42.8、28.2× 43.1、29.0×42.7	
29	石山 駿	1941-	痴絵図閨夢(チェスゲーム)	1977(昭和52)年	陶器	43.0×106.0×106.0	
30	石山 駿	1941-	STICK AND RING	1983(昭和58)年	陶器	8.0×60.2×49.0	
31	川崎千足	1938-	ロマンチズム編み	1977(昭和52)年	陶器	90.5×119.1×26.4	
32	川崎千足	1938-	WORK 85-1	1985(昭和60)年	黒陶	92.4×100.9×24.7	
33	西村陽平	1947-	MIRRORS AND SHADOUWS DATSUN BLUEBIRD- I	1980(昭和55)年	ミクスト メディア	10.3×27.7×23.0	スチール アルミニウム
34	西村陽平	1947-	MIRRORS AND SHADOUWS DATSUN BLUEBIRD- II	1980(昭和55)年	ミクスト メディア	10.5×27.8×23.1	スチール アルミニウム
35	西村陽平	1947-	カン、アルミニウム、オールアルミニウムカン	1983(昭和58)年	ミクスト メディア	45.0×18.0×37.0 23.1×17.6×36.9	スチール アルミニウム

3. 伝統vs.革新 ー日本工芸の二大潮流、伝統工芸展と日展ー

現代日本の工芸は日展系、日本伝統工芸展系という二大潮流によって牽引されてきたとすることができます。

日展(日本美術展覧会)工芸は、戦前の無型(むけい)、実在工芸など工芸を芸術として自立させようとする革新運動をルーツとし、個性的な芸術意欲の表出を重視したことから、芸術至上主義的傾向が日展の特色となっています。工芸分野では光風会や現代美術工芸会などが傘下にあり、特に後者は芸術志向の旗色を鮮明に1961年に設立されました。

一方、文化財保護の視点から1954年に伝統的工芸技術の保存と普及のために「日本伝統工芸展」が創始され、同年、技術的完成度を第一に芸術性をも重視した重要無形文化財(人間国宝)認定の制度が生まれました。

以来、革新と伝統という異なる視点から工芸美術の向上が競われましたが、工芸は素材を扱う技術力の、創造に占める比重が大きく、両者は根っこの部分で繋がっています。このほか、本展にてご紹介してきた多様な価値観からの工芸(陶芸)へのアプローチが、この分野に豊かな実りをもたらしてきたことをご実感いただけたら幸いです。

No.	作者	生没年	作品名	制作年	材質 技法	寸法(cm)	備考
						高×幅×奥行 / 高×径	
36	西本瑛泉	1928-	ひろしま命の復活「平和の祈り」	2009(平成21)年	陶器	52.5×45.0	
37	財満進	1952-	風のトルソー	1989(平成元)年	陶器	74.0×24.0×15.0 70.0×24.0×15.0	
38	古庵千恵子	1933-2022	聴く	2005(平成17)年	陶器	64.0×38.0×28.0	
39	今井政之	1930-2023	金彩玉兎置物	不詳	陶器	11.4×16.6×8.4	
40	今井政之	1930-2023	馬置物	不詳	陶器	14.2×23.0×10.0	
41	今井政之	1930-2023	羊置物	不詳	陶器	13.0×18.5×8.3	

42	今井政之	1930-2023	紫鷄置物	不詳	陶器	11.0×14.9×9.0	
43	今井政之	1930-2023	焼メ灰被イッチン渡り蟹花瓶	1986(昭和61)年	陶器	42.9×26.5	
44	松井康成	1927-2003	練上嘯裂文大壺「寂光土」	1979(昭和54)年	陶器	35.4×44.2	
45	加藤卓男	1917-2005	三彩花器「爽容」	1994(平成6)年	陶器	34.7×33.6×23.1	
46	加藤卓男	1917-2005	ラスター彩「山ノ実蝶文大皿」	1994(平成6)年	陶器	6.8×42.8	
47	三代徳田八十吉	1933-2009	彩釉鉢	1982(昭和57)年	磁器	13.1×56.5	
48	江口勝美	1936-	和紙染八角飾鉢	1982(昭和57)年	磁器	14.3×44.0	
49	小野珀子	1925-1996	釉裏金彩黄釉花入	1984(昭和59)年	磁器	35.7×27.2	
50	小野珀子	1925-1996	釉裏金彩壺「山竝」	1984(昭和59)年	磁器	38.0×28.3	
51	黒川清雪	1931-2019	碎氷文青磁花入	1980(昭和55)年	磁器	25.5×15.2×6.0	
52	黒川清雪	1931-2019	油滴天目釉壺	1994(平成6)年	陶器	21.2×17.5×7.7	
53	黒川清雪	1931-2019	油滴天目釉天目茶碗	2001(平成13)年	陶器	8.5×13.5	
54	黒川清雪	1931-2019	碎氷文青磁壺	1980(昭和55)年	磁器	24.7×20.8×5.3	

招待展示 小企画 岩本道明 陶展 —the moment(作品との出会いの瞬間)—

陶を素材に簡潔でシンプルな作品をつくっています。鑑賞で作品と対峙する瞬間(moment)の簡潔な印象、そのあと土の素材感からじわ〜と醸し出す重厚感。色々な要素が混ざってオモシロく思ってもらえるとうれしいです。陶なのに鉄のように思えたり。硬いのに柔らかかそうに見えたり。先日は「でっかいモンドウフのようですね」とお豆腐屋の職人さんが興味を持ってくださって、つくるひとはとても喜びました。

壺や花器などの「フクロモノ」と呼ばれるうつわをつくるとき、襟のあるカラダに思えてきます。ココに顔をつけるとどんな表情なのだろう、という興味がきっかけで、ヒトのカタチを制作しています。コロナ禍の最中に進めていった人物モチーフ作品。つくり手の感情を表情にのけてつくっています。

— 岩本道明 —

No.	作者	生没年	作品名	制作年	材質 技法	寸法(cm)		備考
						高×幅×奥行	高×径	
1	岩本道明	1971-	MOMENT OFF	2013(平成25)年	陶器	5.0×26.0×65.0		
2	岩本道明	1971-	HANA	2014(平成26)年	陶器	36.0×36.0×16.0		
3	岩本道明	1971-	RING	2013(平成25)年	陶器	10.0×38.0×38.0		
4	岩本道明	1971-	CRATER	2021(令和3)年	陶器	11.0×41.0×41.0		
5	岩本道明	1971-	ヒトのカタチ	2021(令和3)年	陶器	54.0×37.0×17.0		2体1組
6	岩本道明	1971-	ヒトのカタチ	2022(令和4)年	陶器	51.0×24.0×17.0		3体1組

☆☆☆☆ 陶芸(とうげい) ≡ 焼物(やきもの) とは ☆☆☆☆

陶芸とは粘土で形を作り、焼き固めて器物を作る技術です。原料の粘土や焼き方の違いから、いろんな種類の焼物ができあがります。日本の縄文土器は世界でも最古級の焼物のひとつとされています。土器(どき)は500~900℃の比較的低い温度で焼く焼物ですが、その後、窯(かま、焼物を焼くための炉)などさまざまな陶芸技術が発達し、大きく分けて陶器・磁器・炆器の3種類が焼かれるようになりました(炆器は陶器に含まれて分類される場合もあります)。

陶器は、厚みがあり柔らかい形が暖かさを感じさせる焼物です。1200℃くらいで粘土の粒子の間に隙間がやや残るくらいに焼きます。少し水を吸うので、釉薬(ゆうやく)をかけて焼き、表面をガラスの層でおおいます。美濃焼(岐阜県)や萩焼(山口県)、唐津焼(佐賀県)など、その土地の特色ある粘土を生かした陶器が作られてきました。

磁器(じき)は、透き通るように真っ白でシャープな焼物です。磁器は石(陶石(とうせき)という磁器を作るのに適した石)を細かく砕いた磁土(じど)に水などを加えた粘土で作ります。1300℃以上の高温で粘土の粒子に隙間がなくなるまで焼くので、全く水を吸いません。有田焼(佐賀県)や九谷焼(石川県)がよく知られています。作品名に「磁(じ)」「瓷(じ)」という漢字が含まれる作品もあります(ただし「瓷(じ)」は陶器を指すこともあります)。

種類の違う粘土を調合して用いることもあり、例えば半磁器は陶器用と磁器用の粘土を混合して、陶器と磁器の中間の効果を得ます。

陶磁器(とうじき)を作る工程は通常、粘土で作った器物を乾燥させ、800~1000℃位の低温で素焼(すやき)し、釉薬(ゆうやく)をかけて1200~1300℃位の高温で本焼(ほんやき)します。装飾部分に対して陶磁器の本体を素地(きじ)と言います。本焼する前に絵具(下絵具(したえのぐ))で絵を描くことを下絵付け(したえつけ)、本焼き後の釉薬の上に絵具(上絵具(うわえのぐ))、低温で溶けるガラスの粉を混ぜるで絵を描いて焼きつけることを上絵付け(うわえつけ)と言います。

釉薬(ゆうやく)は、焼物の表面を覆うガラス状の層、または、ガラス状の層を作るための溶液を指します。ガラスの原料(珪酸を多く含む鉱石)に、着色剤となる鉄(黒・茶・黄・青に発色)、銅(青・緑・赤に発色)、コバルト(青に発色)など主として金属(の酸化物)と、ガラス原料の融点を下げて溶けやすくする媒溶材(融材とも言い、灰や石灰、鉛などの物質)を加えて作ります。媒溶材の別により釉薬を焼き付

ける温度は800℃～1400℃と幅があり、1100℃を境として低火度釉(鉛などが媒溶材)、高火度釉(灰、石灰などが媒溶材)に分けられます。陶芸家は、独自の色や風合を出すために釉薬の調合を工夫します。作品名に「○釉」と着色剤や色の名を付けて呼称されます。

炆器(せつき)は火に石と書きます。火によって粘土を石のように固くする焼物です。釉薬をかけずに1200℃くらいの温度で長い時間(長いときは20日間くらい)をかけて、ほとんど水を吸わなくなるまで焼き固めます。日本では、備前焼(岡山県)や常滑焼(愛知県)が代表的。炆器の粘土は陶器の粘土より細かく、鉄分や不純物を多くみ、焼くと赤茶色になります。

粘土の成形法は主として次のような手法があります。

1. **手びねり成形**…**つまみ出しづくり**(球状の粘土の中央をへこませて徐々に碗状に成形)、**紐づくり**・**巻き上げ**・**輪積み**(粘土を紐状にして巻きながら積み上げて成形)、**割り出しづくり**(人形などを粘土で成形し、糸で半分に切り、内側の粘土を割り出して再度接着する)、**タタラ成形**・**板づくり**・**指物づくり**(粘土を板状に成形した粘土板＝タタラを組み合わせて成形)
2. **轆轤成形**…轆轤(ろくろ、回転台)の中心に粘土を据えて轆轤の回転を利用して同心円状の円形(球・円柱など)に成形
3. **型起こし成形**…木型・土型(素焼型)・石膏型などに粘土を押し付けて成形。同じ形のを複数作ることができる。
4. **鑄込み成形**…粘土を泥状にして石膏型や素焼型に注ぎこみ成形する方法(外型のみ、又は外型・内型を用いる)。同じものを複数作ることができる。

【用語解説】 作品名、解説文に含まれる用語を一口解説します。概ね、解説文中に説明している用語は省いています。

あ行
色絵(いろえ)＝本焼き後の釉薬の上に上絵具で上絵付けする。
ウィリアム・モリス(William Morris)＝1834年- 1896年。19世紀イギリスの詩人、デザイナー、マルクス主義者。多方面で精力的に活動し、それぞれの分野で大きな業績を挙げた。「モダンデザインの父」と呼ばれる。

か行
ガラス釉＝ガラス質で透明な釉薬。ガラス粉などに着色剤を添加。本来は信楽焼などの灰を媒溶材とする緑色の透明のビードロ釉。
唐津焼(からつやき)＝佐賀県東部、長崎県北部で桃山期から焼かれた陶器。蹴轆轤(けりろくろ)、叩き作り(粘土をたたいて成形)、鉄絵(釉薬の下に鉄で絵を描く)、藁灰釉(わらばいゆう、藁灰を加えた失透釉)などが特徴。
還元焼成(かんげんしょうせい)＝酸欠状態で焼成すること。焼成中の焼物の粘土や釉薬から酸素を吸い取って炎が燃焼する。
九谷焼(くたにやき)＝石川県南部で江戸時代以来焼かれている陶磁器。色絵(白地に赤・黄・緑・紺青・紫の五彩(ごさい)で絵を描く)、青手(あおで)(五彩のうち赤を除く色で白い素地を塗り埋める)などの種類がある。江戸前期を古九谷、江戸後期を再考九谷と呼ぶ。
化粧土(けしょうつち)＝白色粘土の泥漿。素地を白く滑らかに見せ、釉色・色絵が鮮明に。着色剤を加えた色化粧土もある。
沓茶碗(くつちゃわん)＝宮中で用いられた木沓の形に似た楕円形にひしゃげた茶碗。織部焼に特徴的に多く見られる。古田織部が催した茶会の記録に「ひょうげもの(ふざける様、おどける様)」と形容されている。
(日本) **芸術院賞(げいじゅついんしょう)**＝日本芸術院(芸術家の顕彰機関)がその会員以外の者に授与する賞。卓越した芸術作品を制作した者または芸術の進歩に貢献した者に対して授与。受賞者の中でも特に選ばれた者に対して「恩賜賞」が授与される。
黒陶(こくとう)＝黒色の低火度焼成陶器。焼成終了直前に窯内に煙を発生させて燻して黒色に仕上げる。中国龍山文化(BC3000～2000年)を特徴付け、近年では走泥社のオブジェ焼などに用いられた。

さ行
彩釉磁器(さいゆうじき)＝九谷焼の伝統的な5色のうち紺・青・緑・黄の色釉を基本に、色彩の濃淡や対比で現代的に表現する技法。
酸化焼成(さんかしょうせい)＝酸素を充分供給して焼成すること。焼成中の焼物の粘土や釉薬が酸化される。
須恵器(すえき)＝古墳時代中期から平安時代にかけて焼かれた硬質土器。朝鮮半島からもたらされ、穴窯(あながま、斜面を利用したトンネル状の窯)で1100℃以上で還元焼成された青灰色、灰黒色の焼き物。
青白磁(せいはいくじ)＝白磁に青味を帯びた透明釉がかかっているもの。
象嵌(ぞうがん)＝素地の粘土に文様を彫り、凹みに別の色の泥や粘土などを埋める。
染付(そめつけ)＝酸化コバルトを主成分とする絵具で素焼した素地に文様を描き、透明釉をかけて焼成する釉下彩(ゆうかさい)。

た行
炭化(たんか)＝炭化焼き締め。高温の強い還元焼成による燻し焼き。窯を密閉した酸欠状態の不完全燃焼で、薪から発生した大量の炭素を素地が吸着して灰黒色に焼き締まる。
辻音堂(つじしんどう)＝1910-81年。彫刻家。ロダンに魅せられ塑像に没頭後、木彫に転向。戦後、京都市立美術専門学校教授となり抽象傾向を強め、様々な造形素材を試み、陶土による彫刻(陶彫)を完成させた。豪放で強靱な造形力で若い美術家に影響を与えた。

てつえい＝素焼または白化粧の上に鉄を着色剤とする絵具で文様を描き、透明釉をかけて高温で焼成する釉下彩(ゆうかさい)。
陶彫(とうちょう)＝土の造形物を窯で焼成した陶磁器の彫刻。戦後、イサム・ノグチや辻音堂が先駆者となった。豪快で非実用的な抽象表現は陶芸家の常識を超えたもので、前衛陶芸の誕生と発展を促した。

な行
軟質磁器(なんしつじき)＝硬質磁器は陶石を原料に1350℃以上で焼成するが、この技術を持たない16-18世紀のヨーロッパで日本や中国の硬質磁器を模倣して開発された。硬質磁器より多量の媒溶材(長石、石灰石、フリットなど)を配合し、やや低火度で焼成する。媒溶材に骨灰を用いたものをボンチャイナという。

は行
白磁(白瓷)(はいくじ)＝白色粘土(磁土)に透明釉薬をかけた磁器。磁器の基本となる技術。
バーナード・リーチ(Bernard Howell Leach)＝1887- 1979年。イギリス人。陶芸家、画家、デザイナー。白樺派や民芸運動に関わりが深い。富本憲吉と交友し、リーチが楽焼を学ぶにあたり富本憲吉が通訳を務めるうちに富本自らも陶芸家の道を歩み始めた。
備前(びぜん)＝岡山県備前市で平安時代から焼き続けられてきた炆器。ねっとりした土の風合と炎によって生じる素朴で豪快な焼き肌の変化が魅力。
古田織部(ふるたおりべ)＝戦国時代から江戸時代初期にかけての大名、茶人。茶道織部流の祖。千利休とともに茶の湯を大成し、茶器・建築・作庭などに「織部好み」と呼ばれる破調の美を安土桃山時代から江戸時代前期に流行させた。

ま行
无形(むけい)＝戦前の先進的工芸団体(1927-1933)。その後進が実在工芸美術会(1935-1940)。構成員の多くが戦後の日展で主要作家として活躍した。
無形文化財(むけいぶんかざい)＝文化財保護法により演劇、音楽、工芸技術など無形の文化的遺産で歴史上・芸術上価値の高いものを「無形文化財」に、特に重要なものを「重要無形文化財」に定め、それらの技術を高度に体得する者を「保持者(人間国宝)」として認定する。国指定以外のものについて、各地方自治体によっても同様な制度がある。

や行
八木一夫(やぎかずお)＝1918- 1979年。京都市に陶芸家・八木一舂の長男として生まれる。戦後復興期に前衛陶芸家集団「走泥社」を結成、器としての機能を持たない「オブジェ焼」と呼ばれる作品を発表し、現代陶芸に新分野を確立した。
焼き締め(やきしめ)＝炆器(せつき)。釉薬をかけずに高温で長時間かけて焼き固める。